

私を育てた
あの時代、あの出会い

第12回

語らずとも見ていてくれる姿に 信じて待つ大切さを知った

和歌山県 九度山町立古澤小学校校長 橋村伸爾 HASHIMURA SHINJI

教師は日々、さまざまな働き掛けの中で子どもを育てる。そして教師は、共に働く仲間との出会いの中で育っていく。出会いから学んだ教育の原点、そして次代を担う若い世代に伝えたい不易を、橋村校長が語る。

校長の穏やかに諭す言葉に
自分を振り返った

初任校は1学年が1〜2学級の小規模校でした。教師は10人程で、50代の3人の他は、20代の若手教師ばかり。私が唯一の若い男性だったためか、新採にもかかわらず体育主任を任されました。ですから、学校の一大イベントである運動会も、1年目の私が前年度の記録を見ながら、計画を立て、子どもに練習をさせ、当日の進行をしました。同僚は同世代だったので、先輩に教えてもらいつつも、とにかく実践。自分たちで

何でも取り組み、悩み、協力し合いながら教育活動を進めていました。そうした教師集団を見事にまとめ上げていたのが、森本芳明校長です。先生は普段は物静かでしたが、私たちが無茶をしそうになるとそっと寄ってきて、「これは少しきついな」と諭すように言われました。若い時の私は向こう意気が強く、頭ごなしに駄目だと言われたら、たとえ校長でも反論していたと思うのですが、そのように穏やかに言われるとふと立ち止まり、自分の取り組みを振り返ることが出来ました。1年目の私が体育主任になったよ



はしむら・しんじ 専門教科は理科。中学校教師を志すも、県の採用がなく小学校教師の道に進む。中学校教員免許を持つことで中学校にも赴任し、さまざまな経験を積む。粉河町立（現紀の川市立）川原小学校などを経て、現職。

1979（昭和54）

新採として粉河町立（現紀の川市立）長田小学校に赴任。若手教師中心の学校で森本芳明校長の下、多様な経験を積む

1985（昭和60）

那賀町立（現紀の川市立）那賀中学校に赴任

1989（平成元）

岩出町立（現岩出市立）山崎北小学校に赴任。宮本裕校長の下、6年生の学年主任を6年間務める



児童数がどんどん増えていく中学年で団結して指導に当たった

2004（平成16）

打田町立（現紀の川市立）田中小学校に赴任。教務主任を務める

2007（平成19）

和歌山市立有功小学校に教頭として赴任

2010（平成22）

紀の川市立那賀中学校に教頭として赴任

2011（平成23）

九度山町立古澤小学校に校長として赴任

*プロフィールは2013年3月時点のものです

「失敗を恐れず自分で考えて 取り組むことが力になる」



うに、若手にどんどん仕事を任せてくれる校長でもありました。校庭に遊具を設置することになった時は体育主任ということで1年目の私が計画を立てましたし、2年目には教育実習生の指導教諭を務めたのです。

1校目で教育活動に必要なさまざまな経験をさせてもらったことは、大きな財産となりました。まだ新採研修などが充実していませんでしたので、現場で自分で考え、実践し、試行錯誤を積み重ねたことが、自分

の力になったのだと思います。

その経験は、教師11年目に赴任した小学校で生きました。その学校は赴任中の9年間で児童数が500人から1000人に増え、子どもの転出入が激しく、そのために環境が落ち着かず、荒れの傾向が見られました。私は6学年主任を6回務めました。宮本裕校長は学年運営を学年に任せてくれました。普段の学級経営はそれぞれ担任の思いが発揮できるように見守り、何かあったら担任と

一緒に家庭訪問をするようにしました。学年には若手教師も多かったので、指導技術や生活指導、保護者対応など、率先して行いました。私の実践を見て学んでほしいと思ったからです。

恐らく、宮本校長の元にはいろいろな問題が来ていたはずですが。それを現場の教師にほとんど言わず、自分で対応していました。私たちが目の前の子どもの指導に集中できるような配慮されていたことに、校長としてすべきことを学びました。

子どもが安心して 楽しく通える学校を

仕事を任され、自分の考えで進めてきた分、失敗もたくさんしました。中学校で不登校の生徒を初めて受け持った時、私は保護者の学校に行かせたいという思いを優先し、生徒を無理に学校に連れていこうとしました。そのために生徒は心を閉ざし、その後、家庭訪問を何度繰り返しても生徒と会えることはなく、不登校のまま卒業しました。何よりも考えるべきは生徒の気持ちだったはずなのに、私は焦ってしまっただけです。生徒を傷付けたことは今でも申し

訳なく思っています。でも、そうした後悔の念があるから、その後、あんな不登校の子どもの受け持った時、子どもの心の葛藤に寄り添うことが出来ました。家庭訪問をして、たわいもない話をしたり、保健室に登校したら一緒にバドミントンをした。もしかしたら、自分が受け持つ間、その子は不登校のままかもしれません。でも、私は子どもが学校に行きたいと言うまで信じて待ちました。残念ながら小学校はそのまま卒業しましたが、中学校では最初から通うようになったのです。

学校は社会性を身に付けるために大切な場です。いろいろな力を持つ子どもが集うからこそ、一緒に勉強する中で切磋琢磨できます。他の人が頑張る姿を見て、自分も頑張ろうと思えば、互いを認め合うことが出来る。だからこそ、どの子どもも安心して楽しく通える存在であるべきなのです。学校を取り巻く環境はさまざまに変化していますが、子どもを軸に考えれば指導がぶれることはありません。校長としてその思いを伝えつつ、教師が自分の思いを発揮できるような見守り、また支えていきたいと思えます。